世界あの曲この音

胎児はすでに音を聞いているというから、われわれはこれまで生きてきた間に実に多くの音に触れている。なかでも音楽は家庭で、あるいは幼稚園や保育園で接して以来、絶えず身の回りにあったはずだ。今回は各人の経験を通じて記憶に残る曲や演奏など、音楽にまつわる話題を披露してもらった。

一枚のレコード

林　良児

「プルーストの時代を求めて」と題するレコードは、一九七二年にプルースト生誕百年を記念してパリのアリオン社から発売された。しかし、当時の私は修士に入ったばかりで研究に係わる周辺の事情にうとく、そのレコードの存在を知ったのは、それから三年ほど経った頃だった。発注すると一月ほどして届いたのだが、粗雑な梱包のせいかレコードはひどく歪んでしまっていた。試しにプレーヤーにかけたものの正常に回転するはずもなく、波のうねりのように上下しては、低くうなるような音が聞こえてくるだけだった。私はレコードを奥行十センチほどの保管ケースにしまい込み、それきり触れたことはなかった。

プルーストは一八九六年、二十五歳のときに自費で『楽しみと日々』を出版している。この処女作は、当時の文壇の大御所アナトール・フランスの序文や、薔薇の画家マドレーヌ・ルメールの挿絵とともに、友人である作曲家レイナルド・アーンの楽譜が入った豪華な本である。「楽譜入りの本？」。今もそうだが、それは初版本でしか見ることができない。一九八〇年頃に原本を入手した私は、楽譜が付録などではなく、本文として印刷されていることを知った。どのような曲なのか確かめたいと思った気もするが、なすすべはなく、いつしか諦めてしまっていた。

しかし、この夏、久しぶりに『楽しみと日々』を手にしたとき、ふと、アーンの楽曲はあのレコードにも収録されているのではと思った。押入れの奥から、四十年余り、ぎゅうぎゅう詰めのケースのなかに収まっていたレコードを取り出してみるとやはりそうだった。不思議なことに大きな歪みは消えていた。修繕したプレーヤーのターンテーブルにのせて針を置くと、わずかに波は打つものの支障なく回転し、サン・サーンスやフォーレにつづいて、アーンの曲が流れてきた。初めて音楽として聴くことができたその物憂げな旋律は、過去からの定めない呼び声のようだった。

（はやし　りょうじ）

「何よりも音楽を」

小山美沙子

このところ、「音楽」という言葉に出会うと、担当している授業でフランス詩を扱っているせいか、ヴェルレーヌの『詩法』に出て来る「何よりも音楽を」（De la musique avant toute chose）という詩句がまず頭に浮かぶ。詩の音楽性とニュアンスを重視したヴェルレーヌの有名な詩句である。暗示的な言葉、半諧音や畳韻法、奇数音綴、句跨ぎ等を適宜採り入れ、微妙な陰影と共にリズムと音の響きの美学を感じさせるその作法は、ほとんど神業である。若い頃、ヴェルレーヌは、役所勤めの傍らカフェに入り浸って作詩をしていたという。結婚して間もなく家庭は崩壊、逃避行先のベルギーでランボーに発砲して収監された監獄でも、彼は詩人であり続けた。「呪われた詩人」である分、ミューズの秘蔵っ子でもあることを自負していたからに違いない。彼には、絶えず詩的言語の奏でる音楽が聴こえていたのだ。

時に、心ならずも頭の中で呼び覚まされる不快な残像や、不法侵入してくるヤクザな言葉を、心地よい幻影と魅惑的な詩句に自動変換できたら、どんなにいいだろうと思うことがある。どんなに心安らぐことだろうと思う。残念ながらミューズの影すら拝めない私には、古の詩人達の詩句を呪文のように唱えるしかないのだが、詩句をメロディーに乗せて歌うことができればもっといいだろう。幸いヴェルレーヌに限らず、律動性に富んだ諧調的な詩を読んでいると、声に出して歌いたくなることがある。フォーレやドビュッシー、デュパルク、R・アーンといった作曲家達が、ユゴーやボードレール、ヴェルレーヌ等の詩を、美しい歌曲にアレンジしてみせたのも頷ける。レオ・フェレも、ボードレールやヴェルレーヌ、ランボー、アポリネールの詩をシャンソンとして歌い、作品に新たな命を吹き込んだ。

「尚もそして常に音楽を！」（De la musique encore et toujours !）―詩句が奏でる音楽で湯浴みし、魅惑的な幻影に身を委ねるひと時、これもまた「えも言われぬ心地よき時間」（l'heure exquise）に他ならない。

（こやま　みさこ）

秋の夜長は、「江戸のラブソング」で

篠崎ひさこ

秋風が立ち、つるべ落としの早さのように夜が深くなる季節に移ると、何となく耳に心地良い音源が恋しくなる。お気に入りのカウチでリズム&ブルースでまったりするのも好きだが、もっと好きなのが秋の味覚と温めの燗酒で、ニヤニヤと聴く都々逸である。江戸の庶民が口三味線で奏でる小唄や端唄、新内などの大衆音曲の中でも、七・七・七・七・五の音律、二十六文字で表す定型詩「粋な色恋の世界観」に酔うのである。

驚くことに都々逸の起源をたどると、どうもこの名古屋と深い縁があるらしい。江戸末期に、都々逸坊扇歌が熱田区伝馬町・熱田神宮付近に伝わる神戸節（ごうどぶし）の囃子言葉「そいつぁまたどいつだ　どどいつどいどい」が節回しの易しさとも相まって、関東に流れていったという説が起源とされ、「都々逸発祥の地」という碑があるそうだ。

〽傘を買うなら　三本買う（こう）てござれ　日傘雨傘　忍び傘
〽一人でさしたる唐傘なれば　片袖濡れようはずがない
〽犬の遠吠え　新内流し　だれか相手の　欲しい夜

小股の切れ上がったお姐さんやら、おかみさんの怖さ、秋の夜長に殿方はつい～なんていう気持ちも、「粋」に表現されているのである。

似ているがニュアンスが微妙に異なる都々逸ワールドで遊んでほしい。ちょっとした言い回しが聴き手の年輪を見出す詩である。

〽人に言えない仏があって　秋の彼岸の回り道
〽人に言えない仏が出来て　秋の彼岸の回り道

柳家紫朝師匠は「粋曲」と名付け、弟子の柳家小菊先生は、「江戸のラブソング」と唄う「しゃみの音（ね）」で、世の中の喧騒からしばし逃れてみるのも一考ではないか。（チン・トン・シャン）

（しのざき　ひさこ）

ロック再考 ズレこそすべて

佐藤雄大

私は「ロック」はズレだと考えている。それはロックの特権ではなく、どんな芸術でも「人間に対して世界は一様に存在している」と思い込んでいる世界観に「ズレ」を加え、そこに異なった解釈を提示することが使命であることに変わりない。

しかしながらロックは芸術の世界において二十世紀半ばに生まれ落ちた後発組なので、その「ズレ」の極みを行くしかない。その存在価値を理解していないまま「まっとうさ（商業受け?）」を狙ったロックには魅力をどうしても感じられない。

私は「ロック」をこのように考えているため、その趣向にも偏りがあり、例えばビートルズの全曲の中で私が好きな曲といえば「I am the Walrus」「Tomorrow Never Knows」などは外せない。パンクと言っても Sex Pistols や The Clash ではなくニューヨークパンクの雄「The Television」が最高だと感じている（そのリーダーと関係があったあの「パンク女王」の Patti Smith が Bob Dylan のノーベル賞授賞式で「A Hard Rain's A-Gonna Fall」を緊張でやり直しをしていた姿を観ると隔世の感があったが）。

ロックのバンド演奏に関して言えばドラムの「ズレ」がもっとも面白い。もちろん強烈な印象（日常とのズレ）を与えるのはフロントで頑張っているボーカルであったり、ギターなのだろう。しかしあまり前面に出ないリズム隊（ベース+ドラム）が異彩を放つとそれは強烈で、他のものには替えられない表現（解釈）を醸し出し、私はそれが一番面白いと感じている。

その中でも（あくまでも私の中で）群を抜いているのが、The Police の Stewart Copeland である。彼が The Police で作り出したリズムは「おかしい」。おそらく本人は「普通の八ビート」は叩きたくないと考えているのだろう。どの曲でも「ふつうではない」ドラミングとなっている。もちろん当時はやっていたスカやレゲエの影響もあったと思われるがそれにしても「ズレ」を好んで作り出している。私は彼のクセが前面に出ている二枚目のアルバム Reggatta de Blanc に収められているドラムが大好きである。「絶対に普通に落ち着かないぞ!」という気概が感じられる「秀逸な」ドラムである。

（さとう　たけひろ）

モーツァルトのレクイエム

高瀬淳一

一九九〇年代の一時期、世界的に「モーツァルト効果」なるものが流行った。いまでは否定されているが、モーツァルトの音楽には知能を高める効果や野菜をおいしくする効果があるなどとされたのである（今の研究ではモーツァルトの音楽に限ってそういう効果があるわけではないとされる）。もちろん今も、この説の信奉者はあちこちにいる。わたしは今、福島県の磐梯山麓にいるのだが、ここにはモーツァルトのコンチェルトを聴かせながら発酵させた日本酒があり、蔵粋（これでクラ・シックと読ませる）の名で売られている。

たしかにモーツァルトのコンチェルトには、例えば「フルートとハープのための協奏曲」の第二楽章のように、否応なしに心を揺さぶってくるものがある。酵母菌が活性化するかどうかは不明だが、わたしのような鈍感な人間でさえ、細胞の一つ一つに音楽が染みていく感じを覚えることがある。

コンチェルトではなく宗教曲を聴かせたらどうなるか。興味深い研究テーマだと思う。静かな「アベ・ベルム・コルプス」なら味がマイルドになりそうだし、ウキウキ感のある「エクスルターテ・ユビラーテ」なら成長が早まりそうである。ただ、残念ながら、有名な「レクイエム」は複雑すぎるし、書き上げる前にモーツァルト自身が亡くなったので使えないだろう。

映画『アマデウス』では、凡人作曲家のサリエリが嫉妬のあまり天才作曲家のアマデウス・モーツァルトを精神的に追い込んでいく。死者のためのミサ曲であるレクイエムを書かせながら、モーツァルトに死をもたらそうという企てである。実際この曲は途中までしか書かれていないので、さもありなん、の物語になっている。

わたしは、このレクイエムが好きで、高校生の頃からよく聴いた。大学生時代、カトリック東京大司教区の東京カテドラルに聴きに行ったこともある。フロイト的に言えばタナトスにつきまとわれた少年期を振り返り、ハイデガー的に言えば「死に向かう存在」である自分の成人後を予見したい気分だったのかもしれない。いずれにしてもモーツァルトのレクイエムは青年期の思い出の曲である。成長をもたらすモーツァルト効果があったとは思わないが、気分の改善には役立ったありがたい一曲である。

（たかせ　じゅんいち）

名演は、なぜ仕事の効率を上げるのか

小野展克

実務の世界から大学教員に転じて幸せだと感じたことの一つは研究室で仕事ができることである。そして、音楽を聴きながら作業に没頭している時、その喜びがはっきりと実感できる。若手記者だったころ、財務省の記者クラブで深夜にイヤホンで音楽を聴きながら、大手銀行の破綻に備えた予定原稿を用意していたら「真面目にやれ」と先輩記者に叱られた。集中力が高まり、生産性が上がるのだから良いではないかと思ったが、協調を優先、同調を大切にして言葉を飲み込んだ。それが、今では卓上のスピーカーから大音量を響かせても、突然、訪ねてきた学生を驚かす程度で、誰にはばかることもない。好きなのはバッハ、モーツァルト、シューマン、ラヴェル、マーラー、ブルックナー…などだ。その時々にお気に入りの曲があるのだが、例えば最近ならシューマンの交響曲第四番だ。シューマンが妻のクララに送ったという逸話が本当かと疑いたくなるほど灰色の雲が垂れ込めたように曲調は暗く、随所にシューマンの懊悩すら感じられる。セルジュ・チェリビダッケ指揮、ミュンヘンフィルハーモニーの演奏は、重厚な響きと堂々としたテンポで、幽玄な森をさまようかのような気分に浸らせてくれる。好きな曲は様々な演奏で聴き比べるのだが、お気に入りの演奏でないと、なぜか仕事にスムーズに入れない。しかし、ここで、はたと重大な矛盾に気付く。好きな演奏を厳選して聴いているはずなのに、私が没頭しているのは、授業の準備や原稿の執筆だ。鳴り響く名演は意識の脇に追いやられ、曲が終わって「あれ、一時間もパワポを作成していたのか」と驚くことすらある。これはいったいなぜだろう。面倒な仕事から逃げたい気持ちを名演を聴く快楽で誤魔化しているのではないかという仮説を立ててみたが、自分のことなのに本当かどうかはよくわからない。と言うわけで、このエッセイもバッハの管弦楽組曲四番を聴きながら書き終えた。指揮は、やはりカール・リヒターでなければいけない。

（おの　のぶかつ）

「バルセロナ」

松本純子

今年の七月二十五日でバルセロナ・オリンピック開幕から二十五年経ち、二十二日のエル・パイス紙のウェブ版に「バルセロナ」に関する記事が掲載された。ロックバンド、クイーンのボーカリスト、フレディー・マーキュリーと世界的オペラ歌手、モンセラ・カバリェとの交友、そして、バルセロナ・オリンピックの開会式で「バルセロナ」を二人で歌うことを夢見ていたフレディー・マーキュリーがその前年に亡くなり、三大テノールの一人、ホセ・カレーラスが代役を務めたことなどが書かれていた。

それを読んで、ユーチューブで、一九八八年のLa Nitフェスティバル（於バルセロナ）で二人が歌う映像を見た（いや、久々に聴いた。私が凄いと思うのは彼の歌声の方で、パフォーマンスはやはり趣味ではない）。モンセラ・カバリェと堂々と渡り合うその歌声はジャンルを超えており、クラシック漬けで育った私を振り向かせた理由が、今更ながら分かったような気がした。

ロックのもつメッセージ性は評価しながらも、音自体をほぼ騒音としか認識していなかった私が彼の声に出会ったのは、確か「Made in Heaven」を初めて聴いた時だ。その声に魅了されたことに私自身が一番驚き、潔く認めることができなかった。この声との出会いの後に、レコード店でジャケットを見た時のショックは相当なもので、あの歌声と簡単には結びつかず、この歌手との出会いは、今日に至るまで、私の中ではうやむやなままになっていたような気がする。この機会に素直になって、当時私を惹きつけた曲を再度聴いてみる気になっている。

バルセロナ・オリンピックでは、フレディー・マーキュリーはそこに立って歌うことが出来なかったが、後に、一九九九年のカンプ・ノウでのチャンピオンズ・リーグの決勝戦というスポーツ・イベントの大舞台で、モンセラ・カバリェがフレディー・マーキュリーの映像と共に歌っている。

（まつもと　じゅんこ）

Phil Ochs: Protesting Hypocrisy

Juanita Heigham

Although I'm not particularly musical, I come from a musical family. My mother is a piano teacher; my sister teaches elementary school music; my brother is an accomplished baritone; and my father was a music trivia buff par excellence. As a child, my home was filled with music. It was mostly classical, but my parents appreciated music in any form, so there was other music as well. Thus, it is not surprising that my father, a civil rights activist, introduced me to protest songs when I was young. I came to love music of the 1960's, music by the Doors, the Who, Joan Baez and Bob Dylan, but I particularly liked a less well-known artist, Phil Ochs. Perhaps my favorite song is one of his called "Outside of a Small Circle of Friends". It has a bouncy, cheerful tune that belies its grim lyrics about assault, poverty, pornography, and most pointedly, hypocrisy.

The song begins with the singer observing a woman being grabbed and then dragged to some bushes. He considers calling the police to get help for her but decides that the game he is playing is too much fun to stop. He then justifies his decision to do nothing with the short chorus, "I'm sure it wouldn't interest anybody outside of a small circle of friends". The verses continue with flippant descriptions of unconnected but equally desperate situations that are all dismissed in egocentric ways. Each verse ends with the one-line chorus, "I'm sure it wouldn't interest anybody outside of a small circle of friends". The penultimate verse explains how the singer's friend was sentenced to thirty years in prison, and he believes the judgment is unfair; however, he cannot be bothered standing up for him. It seems that even friends are not "interested" in helping friends in need.

I like this song because it catches you off guard. It has a lively tune played on a clinking piano, and you first believe it is going to be a lighthearted song. The singer's cheery delivery of the lyrics adds to this deception. However, as you listen, you realize it is not a merry ditty but a black commentary on aspects of human behavior that rise up in society all too often. The juxtaposition of frivolity and tragedy gives this song teeth that some other protest songs do not have. And that is why I like it.

（ハイアム　ワニータ）

Shape-note Singing

Douglas Wilkerson

The air surrounding the ancient mountains reverberates to the sounds of choral singing. Thin and tired voices are raised in communal praise and thanksgiving, tunes familiar to those versed in Protestant hymnody. However, the entablature used by the singers is distinctive. Musical notation uses the common five-line staff, but the form of the note heads is unusual: squares and triangles are used along with the ovals seen in most modern printed music. This is shape-note singing, a form of choral singing which draws on the large repertory of post-Reformation four-part hymn singing. Though the printing of music for shape-note singing was a nineteenth-century innovation, the distinctive note heads remind one of the earliest printed music. The fascination of this music lies, however, not primarily in its visual richness. Contemporary performance practice marvelously preserves a number of features found in late-medieval music, not far removed in time from the ancient Gregorian chant, itself rooted in most ancient psalmnody. As heard in the Appalachian region of the American South shape-note singing glories in the pure harmonics of the octave, fifth, and fourth, making scant use of the *quinta fissa* ("split fifth") that so grated on the ears of early modern musical theorists, more attuned to the ethereal music of the spheres than to the artificial demands of chromaticism and frequent modulation. Melodies often use the pentatonic scale, and tunes in the Aeolian and Dorian modes are common. Harmony slips elusively back and forth between major and minor modes, often by means of a subtle glissando. Fuguing tunes preserve a primitive polyphonic texture. Though generally avoided, when thirds are used in harmony, they are pure, primordial thirds, tuned to the harmonics of the natural world, not the artifice of instrument makers. The choral texture relies heavily on stable, resting intervals, and thus conveys in the structure of the music itself the eternal peace and rest described in the cherished words of the sacred poetry thus intoned, and sought after by the world-weary singers. For a brief moment in secular time, we are touched by eternity.

（ウィルカーソン　ダグラス）

East Asian Pop Music and Gender Performance

Lucy Glasspool

One of the main reasons I came to live in Japan was because I have always loved its pop culture, as both a hobby and a research object. I have been studying and writing about pop culture and gender since I was an undergraduate, and this includes music. I am a big fan of several Japanese and Korean artists; but this is not just because their music is catchy or because their live shows are fun.

Something I find most fascinating about music culture in East Asia is the crucial role played by *visuals* as well as sound. In particular, the way in which certain music genres construct ideals of masculinity that are very different from those in my home country, the U.K. These genres, through the androgyny, beauty, and personal interactions of the male musicians, promote a kind of gender fluidity and male sexual ambiguity that we do not often see in mainstream pop music in the West. Examples include the visual-kei genre of rock music in Japan, where the performances of bands like Nightmare and Versailles frequently involve long hair, makeup, and cross-dressing; K-pop supergroups like BIGBANG, whose popularity is spreading new ideals of masculinity to fans all over the world through their use of makeup and their promotion of the beauty and fashion industries; and new Chinese boyband Acrush, whose members look and dress like cute boys but are actually all female.

Of course, male androgyny on the stage has been popular in East Asia for centuries, if we think of Japanese kabuki and Chinese opera. What is interesting about the trend in pop music over the last decade or two is that all the genres I have talked about are aimed at women, as female consumer power grows in Asian markets. So, for once, it is women who dictate what the ideal man looks and acts like; and the spread of East Asian pop cultures like Hallyu is helping young people around the world find alternatives to restrictive forms of dominant masculinity.

（グラスプール　ルーシー）

Writing and Music

Iain Maloney

Like a lot of authors, it was music that got me into writing.

My debut novel, *First Time Solo*, is entirely dependent on music. The main character, Jack, is a jazz trumpeter and, while training to be a RAF pilot in 1943, starts a band with three of his comrades. Music as a social lubricant, music as a shorthand between friends, music as a means of exploring other cultures, music as language, music as the backdrop for romance and more, all these are woven through the staves of the novel but for me, writing it, music was the window to the past. Jack's internal monologue is seasoned with the music he loves and, in order to find his voice, I had to hear what he hears, think how he thinks.

For my second novel, *Silma Hill*, things weren't so straightforward. Set in a rural Scottish village in the 18th century, there was little music I could draw on directly. For a Gothic tale of witchcraft, torture and death, I needed something stronger. I found it in Mogwai's soundtrack to the French zombie TV drama *Les Revenants*. Haunting, brooding, the threat of violence never far away, yet beautiful, moving and melancholy, the instrumental tracks rising and falling like waves of emotion gave me an atmosphere in which I could build my world. Songs like "Wizard Motor" get inside your head, unsettle you and never leave. When you're writing horror, that is the ultimate goal.

My third novel, *The Waves Burn Bright* (to be published May 2016), is the story of a family torn apart by the Piper Alpha disaster. It is set between 1980 and 2013 so finding suitable music was easy. I gorged myself on early REM, Pixies and The Sugarcubes until a thought stopped me like a scratched 12 inch. I was recreating my 1980s, not my character's. I switched off the music, sat back and had a chat with Carrie, my main character. It turned out she wasn't much into music. Background radio, that was fine, but she didn't buy music. Whatever was on the radio was fine for her. Strangely this absence of music in her life – so very, very different from me – was the moment when she became whole, three dimensional, real. After that awakening the novel rolled out of me. Sometimes silence is profounder than any song.

（マローニ　イアン）

« Envole-moi » ou l'envie de se dépasser

Jérôme Paccoud

Redécouverte durant l'été dernier, cette chanson entraînante et rythmée fut pourtant écrite, composée et interprétée par Jean-Jacques Goldman en 1984. Dans un style plutôt rock, celle-ci alterne entre rythme marqué et refrain mélodieux mêlant de façon habile la guitare électrique et le violon ; association avant-gardiste alors. Très largement diffusée à la radio et la télévision, cette œuvre faisait partie de mon univers musical de collégien. Si le clip vidéo, avec une mise en scène et des coiffures d'époque prête aujourd'hui à sourire, cette chanson populaire traite néanmoins d'un sujet sérieux et délicat. Son auteur dépeint avec intensité l'univers difficile de la banlieue, sous des aspects esthétiques et sociaux mais pas seulement, comme l'attestent les paroles *: « la nuit camoufle, pour quelques heures la zone sale et les épaves et la laideur […]ici il n'y a pas de saison pour être mieux »* et souligne les injustices et la violence inhérentes à son environnement immédiat : *« règle du jeu fixée mais les dés sont pipés […] j'ai pas choisi de vivre ici entre l'ignorance et la violence et l'ennui »*. Ces aspects sont mis en opposition avec l'envie indéfectible d'une réussite sociale : *« j'm'en sortirai, j'me le promets […] remplis ma tête d'autres horizons d'autres mots »* aux prix d'efforts conséquents. Cette réussite convoitée passe par une éducation solide : « *à coup de livres je franchirai tous ces murs »*. Plus de trente ans séparent cet opus de la situation actuelle que connaît l'Hexagone, pourtant il me semble extrêmement contemporain tant dans la mélodie que les paroles. L'œuvre brosse le portrait d'une catégorie de jeunes en difficulté mais volontaires et plein de ressources. Ce morceau véhicule par là même un formidable message d'espoir dont notre société a cruellement besoin. Elle mérite ainsi d'être redécouverte ; c'est ce que propose Génération Goldman, une troupe formée par une nouvelle vague de chanteurs qui la reprennent depuis peu. L'originale comme la nouvelle version procurent une énergie incroyable permettant de surmonter les obstacles et d'aller de l'avant.

（パク　ジェローム）

C’est pas des histoires

Etienne Marceau

La musique traditionnelle (ou folklorique, ou “trad”) québécoise est une musique joyeuse, dansante, faite pour s’amuser. Elle est née d’un métissage principalement français-irlandais, grâce à l’immigration d’Irlandais dans l’est du Canada au 19e siècle. On l’écoute surtout durant le Temps des Fêtes, pour ensuite la mettre aux oubliettes jusqu’à l’hiver suivant. Pourquoi ne pas en écouter l’été ? Mystère. Le folklore québécois, c’est l’hiver.

Élément essentiel de la musique trad, la chanson à répondre exige la participation de l’auditoire. Le chanteur conte son histoire et l’audience doit répéter, un peu à la manière du gospel. L’histoire progresse ainsi lentement, et peut sembler longue à quiconque ne participe pas. On dit que c’est pour permettre à l’auditoire alcoolisée de suivre l’histoire...

Cependant, Il ne faut pas croire que le trad est une musique de party sans sérieux. Les rythmes rapides requièrent des musiciens en parfait contrôle de leurs instruments, et les textes ne se limitent pas aux récits de voyages ou des histoires comiques : on y aborde aussi les tabous traditionnels de la société québécoise, la religion et la sexualité. Les instruments et les genres musicaux sont le résultat de notre épopée historique : les beaux textes français sont accompagnés à l’accordéon, la gigue irlandaise est jouée par un violoneux virtuose, sans oublier les reels écossais et le rigodon provençal. Le rythme est assuré par le tapage de pied, une podorythmie aussi endiablée qu’intarissable.

La musique traditionnelle a de nombreux jeunes adeptes, et est bien vivante au Québec depuis une renaissance vers la fin des années 90. Les artistes d’aujourd’hui composent de nouvelles chansons avec des sujets actuels, et la musique change au gré des apports culturels des différentes communautés du Québec, notamment la musique latine, le country, le jazz, et la musique du Moyen-Orient. Le trad évolue et s’embellit.

（マルソ　エティエン）